瀬戸の夕陽

香北町猪野々在住の西本安文さん(９３歳)が昭和５９年６月(当時５５歳)に発行した、自らの戦時中の体験を綴った手記『瀬戸の夕日』。

一部抜粋し、表記はなるべく原文のままでご紹介します。

▼糧秣廠の同僚(前列右から２人目が西本さん)　昭和１８年

はじめに

平和な日々が続く現在、戦争の恐さ、悲しさを知らぬ世代が多くなりつゝある今、正義の美名のもとに、年端もゆかぬ少年少女までがかり出された去りし日の太平洋戦争の苦労を後世の子孫に伝えたく、39年前の記憶をたどりながらつたない文書ではございますが、手記を書く事を思い立ちました。

成人してふと我に返った時、自分は日本の侵略戦争に協力した大変な間違いに気がついたのでした。私も、もうやがて60才に手の届く年になりました。手記に書き残す事によって、私の戦後は終りにしたいと思います。

国のために

太平洋戦争もはげしくなり始めた昭和18年３月末、高等小学卒業直後（数え年15才の春）戦に勝つ為と勇んで家を出た。師、同窓生、親類の人々などに見送られて、広島市宇品にあった糧秣廠という兵隊さんの食糧を補給する工場に勤めるため、高知職業紹介所の人と共に、同窓生４人で出発した。

送ってついて行ってくれた父とも別れて寄宿舎に入り、二舎七班の先輩十人程がいる大部屋に入った。これからどんなに淋しい毎日が待ち受けているか考える余裕もなく、国の為、戦に勝つ為と教えられての旅立ちではあったが、別れる間際、父娘はお互いの涙を見た。父は娘の涙を見、娘は父の涙を始めて見た。涙で別れた父娘が敗戦という変事に合い、二年半後土佐山田駅で涙の再会になろうとは夢にも考えず、翌日から少年工として、又軍属の一人としての教育が始まった。詔諭五箇条、戦陣訓、戦宣の詔勅、天皇皇后両陛下のお名前等、務めの日々の心がけ心がまえ等々。昼間は皆んなと同じ行動をするため父母の事を忘れていても、夕食時、おはしを持つ手にボロボロと涙がこぼれ、砂をかむ思いの食事で、又夜中遠くの汽車の汽笛の音を聞けば「帰ろー」と呼んでいるようで又涙が出たものでした。

そんな或日、寄宿舎付の竜村少尉に、中国新聞に出すために、「我ら職場に玉砕せん」という記事を書くように命ぜられた。書く事によって工員の士気の向上をはかる為らしかった。その頃戦局は日増しに不利になり、そろそろ南の島々は取り返されて行くのもしらず、私達は大本営発表のニュースを信じて働いていました。作業は主に牛肉の罐詰作業で、戦地の兵隊さんが最後という時に食べるものだと言い、罐の内側にはウルシを焼き付け、外側にはニスをぬりさび止めとして、携帯罐の小罐と、尋常罐の大罐の二種類を作っておりました。

空襲　九州行

米軍の空襲も日毎にはげしくなり、西の空からB29が飛んで来て街のあちこちに焼夷弾を落して行く。糧秣廠の上司も真剣に工場疎開を考えるようになり、県内の竹原町か、愛媛県の西条か、又九州の佐賀かとさゝやかれ始めた頃には夜毎空襲警報が発令されて、その度に防空壕へ入り壕から頭を出して、飛び交う探照燈の光の中で敵味方の空中戦を見、どちらとも区別の出来ない飛行機が火をふいて落ちて行くさまを見、どこからか打ち上げられる大砲の轟音を聞き明日の命はどうかと話し合った。

生まれて初めて海底トンネルを通り、佐賀県鳥栖で列車を降りた。佐賀県、三養基郡、旭村というところの地下足袋で名高い旭ゴム会社の寮に仮り住まいの生活が始まった。

作業は、トラックの荷台に乗ってあちこちの製材所へ行き、製品を集めるのを手伝う仕事だった。

その内、広島へ新型爆弾が落されたという話が伝わって来た。残っていた人達は、ほとんど亡くなられたとの事だった。

空襲は日に日に激しく昼夜の別なく、米軍の艦載機がくもの子を散らしたように後から後から飛んできて、ダダ・・・と機銃掃射をしては逃げて行く。もうここでは飛び立って迎え撃つ味方の飛行機の一機もなかった。もうこれ迄と松の根元にしがみついてこらえた事も、何度あっただろうか。

そんな或日、道端でふとひろった古い西日本新聞の切れはしに、今年の田植は高知式田植に、その方が早くて疲れない云々・・・と書いた記事を読んで何かしら故郷を思い出して一瞬ホロリとさせられた。

終戦

宿舎付きの上司（少尉）は夕食後、めずらしく皆んなに歌をうたえと言った。

皆んなは代る代るうたい、又合唱もして一時空襲を忘れて楽しんだが、広島市内出身のKさんは、「もう歌は止めた。あんたら歌えるものなら歌ってみんさい。日本は負けたのよ。手を上げたのよ」と泣き始めた。

一瞬皆んなは耳を疑った。本土決戦と力んでいた時、どうしても信じられない言葉だった。少尉が「残念だが日本は敗けた。明日は天皇陛下自らラジオで放送することになっている」と言った。軍という殻の中に閉じ込められて外部との接触のなかった私達は、戦局の不利になってる事を少しも知らなかった。

何の為に朝夕戦陣訓をとなえ、詔諭五箇条の奉唱をして天皇陛下の御為と不自由をしのんで働いてきたのかと何とも情ない思いもしたが、その一面ほっとする気持ちもあり複雑な気持ちだった。

帰途

貸切列車を待ってようやく８月30日、全員鳥栖駅から帰途についた。山口県岩国を過ぎ広島駅が近づくと、宮島口通いの電車の焼けげた残がいが多くなった。爆心地に近い横川駅に列車が止った時、ここがつい近く迄私達が暮した広島市なのかと驚いたものでした。

見渡す限り焼野原、つい先日迄青々と茂っていた街路樹は黒こげとなって地上二・三米の骨を残すのみ、建っている物と言えばくずれ残った高層建築、線路上に残るわずかにそれらしき形を留める市街電車、人一人、猫の子一匹住まぬ無人と化した街。

あの日、車窓から見た悲惨な光景は39年過ぎた今日でもまぶたの裏にくっきりと焼きついてはなれません。

土讃線の列車に乗り土佐山田駅が近づいた時、車内放送で「この列車は急行ですので山田には止まりません。次の後免で止まります」とうらめしく山田の駅を見ながら後免駅に着いたのは日暮後だった。

ここは当時、安芸行きの電車も走っていた事もあって急行が止まる駅だった。終電車も出た後だったので安芸方面に帰る人々も一緒に駅で一夜を明かした。翌朝、まだ明けきらぬ後免駅を後に山田方面へ帰るBさんと二人、山田駅迄歩いて帰る決心をした。

久し振りの山田駅で、ふと待合室を見るとそのベンチに父が物思いにふけって坐っていた。聞けば７日前から来て駅前の旅館に宿をとって私の帰りを待っていたという。

二年半前入廠の時浮かべた涙とは別の感激の涙が父娘の目に浮かんだ。

我が家に着いたのは、昭和20年９月２日午後３時頃で終戦の日から半月以上も過ぎていた。

兵隊に出ていた兄は負傷がもとで病気となり姫路陸軍病院に居たので終戦後３日目で帰ってきていたが、（後に病死）猪野々から出ていた人は、今日はだれ、今日はだれと皆んな帰った中で、私一人遠くにいたせいもあってその当時便りも出来ず「生きていれば帰るだろう」の親心で山田の駅で待つ父以上に母は女だけにそれ以上に心配して夜もねむれなかったと言う。

長男を戦争で失い、長女の私がこれほど迄心配をかけた母は恍惚の人となりはじめた今でも当時の話をよくし又、克明によく覚えている事を思う時、人の子の親の現在の私は父母の心配は如何ばかりであったかと思うと同時に、時局柄行かなければならない職場であったが大変な親不孝でもあったのです。

戦争はもうこりごり、二度とあってほしくない。私は声を大にして叫びたい思いです。

▶旧陸軍糧秣廠で、現在は広島市郷土資料館（西本さん撮影）